

報告

ブックフェア&講演会「教会と社会」 ～キリストとともに生きるカトリック市民とは～

菊地了

はじめに

本企画の主旨は以下のとおりである。

2019年の教皇フランシスコ訪日によって、社会問題に積極的にかかわるカトリック教会の姿が一般に広く印象付けられたように思われる。しかし、日本では馴染みの薄いこのようなカトリック教会の姿は、多くの人の中では漠然とした印象のまま留まっているのではないだろうか。そこで、「教会と社会」をテーマにオンラインブックフェアを実施し、カトリック教会の社会活動の理論と実践について学ぶ機会を提供したい。具体的には、A. 教会と戦争「正戦論から『地上の平和』へ」、教会と経済「教会と資本主義」、教会と環境「聖フランシスコと教皇フランシスコ」という三つの視点から関連書籍を紹介する。B. 書籍の選定にあたっては、実際に教会組織でこれらのテーマに関連する活動に携わっている人々にも推薦してもらう。C. ブックフェアの公開を機に活動家を招いてオンラインイベント（講演会）を実施する。

当企画はもともとは例年の形式にならって図書館入口付近でのブックフェアとキャンパス内での講演会を予定していたが、コロナ禍でキャンパス入構規制が敷かれ、予定していたドイツからの講演者の入国も困難となったため、双方ともオンラインでの実施となった。

以下では、オンラインブックフェアとウェビナーについて順に概要を説明したのち、企画担当者すなわち筆者の学びを考察として記すことで本企画の報告としたい。

1. オンラインブックフェア「教会と社会」——ともに生きるためのヒント

まず、ブックフェアであるが、ブックリストを研究所のホームページ上に公開する形式での実施となった。

推薦者には、神学者や歴史家等カトリック研究を専門とする研究者や社会問題に携わっている教会関係者を筆者が選び、推薦を依頼した。また、筆者が見つけた推薦図書にその著作やその他の図書の推薦を依頼したこともあった。結果、23人の推薦者に126冊の図書を推薦していただくこととなった。

当初こちらから提案したのは、冒頭に掲載した主旨文にもある通り、教皇フランシスコのメッセージの方向性から案出した「教会と戦争」(11冊)(カッコ内の数字は推薦図書数)、

「教会と経済」(29冊)、「教会と環境」(9冊)という三つのカテゴリーであった。(カテゴリーの副題はいずれも使用しないこととした。)しかし、上記カテゴリーにおさまらないが、「教会と社会」について考えるために有意義なので推薦したい、という図書も多かったため、編集段階で新たに「教会と社会」(全般)(17冊)と「教会と政治」(11冊)と「教会と共生」(49冊)を追加した結果、推薦図書は最終的に6つのカテゴリーに分けられた。

六つ目のカテゴリーである「教会と共生」は「その他」的な役割もあるため、一番多くの図書が含まれている。よって、その中にサブカテゴリーをつくることとなったが、サブカテゴリーのなかでも「その他」的な役割を担っているのが「ともに生きるためのヒント」というものである。これはそもそも推薦者のひとりである宗教学者の島藺進氏が自身の推薦図書に用いられた「ともに生きる」というカテゴリー名に由来している。

このブックリストに掲載されている書籍を読めば、国際政治の重要なプレイヤーであるバチカンから、釜ヶ崎で「小さくされた」人々と生きる本田哲郎神父まで、知恵であり、友人であるイエス・キリストに学び倣う人々の構成体「キリストのからだ」である教会を構成する多様なアクターの多様な活動について知ることができる。さまざまな背景をもつ読者の方々が、それぞれの人生のいろいろな場面で活用できるように、「ともに生きる」ことの大切さを学び、それを実践するためのヒントを得ることができれば幸いである。

なお、オンラインブックリストは図書館でのブックフェアと異なり常時掲載が可能なため、ブックフェアは開催しない予定であったが、公開時期が四旬節のはじまりと重なったため、2/17(水)から4/3(土)までをブックフェア期間と定めて広報を実施した。四旬節といえば、断食が知られており、単なる節制の時期とも思われがちであるが、実は、世界中のカトリック教会で、貧しい人々や虐げられている人々、その他援助の必要な人々との連帯を促すさまざまなキャンペーンが行われている、愛の実践の期間でもある。

以下に、広報文でも引用した教皇の四旬節メッセージを一部抜粋する。

愛は、他の人がよい方向に向かうのを見て、喜びます。だれかが孤独、病気、住む場所のない状態、侮辱、貧困などによって苦悩していれば、愛も苦しむからです。愛は心の躍動であり、それがわたしたちを自らの外へと出向かせ、分かち合いと交わりのきずなを築くのです。

「人類愛から始めるなら、だれもがそこに招かれていると感じられる、愛の文明に向けて進むことができます。愛は、そのすべてに及ぶダイナミズムをもって、新しい世界を築くことができます。愛とは、何も生み出さない感情ではなく、すべての人にとって有効な発展の道を得る最高の方法だからです」(『Fratelli tutti』183)。

[中略]

「愛によって視界を変えられたまなざしさえあれば、他者の尊厳に気づけるようになり、貧しい人は、そのはかり知れない尊厳のままに認められ、大切にされ、その人

らしさとその文化ごと尊重され、真に社会に溶け込めるようになります」(『Fratelli tutti』187)。¹

同ブックリストは、来年度も更新し、また四旬節にブックフェアを実施したいと考えている。本稿の読者の方々にもぜひ同ホームページを訪れていただきたい。そして、「教会と社会」についてともに考えるためになにかよい本があれば、同サイト掲載の推薦フォームを用いてご紹介いただければと思う。

2. ウェビナー「教会と社会」 — ブルンジ人神父の和解と共生への試み

講演者として招いたブルンジ人カトリック司祭デオグラシアス・マルフキロ神父は、ドイツ・フライブルク大学で和解のプロセスを専門に研究しながら、みずから創設した、アフリカの平和と発展を促進する NGO、RAPRED-Girubuntu の代表を務めている。筆者はフライブルク大学神学部カリタス学研究所で同師と同窓・同僚であったため、かれの学術研究や平和活動の紹介を通して日本における「教会と社会」への関心を深めていただければと思い、講演を依頼した次第である。

ウェビナー当日は、研究者や学生、教会関係者など、日本を中心に、ドイツ・韓国・ケニアなどから、歴史家や哲学者、牧師やシスター、ドイツ語科の学生、アフリカに関心を持つ高校生、ケニアの活動家、ソウル大学の大学院生など、多様な背景を持つ方々にご参加いただいた。また、Q&A を中心とした対話は予定を1時間超えて、活発な議論をすることができた。なお、講演の言語はドイツ語であり、筆者が司会と逐次通訳を務めた。

講演内容の報告は本誌掲載のデオグラシアス神父による記事に譲るとして、以下では簡単に企画者としての筆者の感想を述べることにする。

筆者としては、まず、デオグラシアス神父の活動が学術研究と平和活動の連関関係にあることが、学外の NGO との連携を通して社会への貢献を試みるグローバル・コンサーン研究所の姿と重なってみえるところが多く、非常に興味深かった。また、連邦・州・市などドイツの行政機関からの協力やカトリック教会（教区レベル）による後援が得られている様子を見て、ドイツの市民社会という恵まれた環境に強い印象を受けた。

具体的な活動内容としては、和解の研究がもっとも興味深かったが、なかでも、筆者を含めて、質疑応答でも参加者の関心をもっとも引いていたのは、和解におけるトラウマへの対処に関する研究であった。デオグラシアス神父によると、欧州における第二次大戦後やユーゴスラビア紛争後の和平への試みとブルンジ/ルワンダにおける虐殺後の和解プロセスの事例の比較研究によって、トラウマへの対処が和解プロセスに必須であることが示

¹ カトリック中央協議会「2021年四旬節教皇メッセージ」

<https://www.cbcj.catholic.jp/2021/02/15/22109/> (2021年4月7日閲覧)。

されたということであった。(カリタス学研究所の所長クラウス・バウマン教授は、カトリック司祭・神学者でもあるが、精神分析を専門とする心理療法家でもあり、トラウマ対処における宗教やスピリチュアリティの役割について研究している。また、同研究所では、質疑応答でもご活躍いただいたクロアチア出身の医師、アンドリヤナ・グラヴァス (Andrijana Glavas) 氏がカトリックの教会組織を中心とするユーゴスラビア紛争後のトラウマ対処を研究している。)

質疑応答で RAPRED-Girubuntu のドイツ人理事が強調していたように、欧州の平和というものは欧州人にとっては決して当たり前のことではなく、第二次大戦後に協働によってともに構築してきたものであるという意識がある。このプロセスには、数々の政治的・文化的事業が含まれているわけだが、共に過去に向き合い、赦しと和解のために働き続けるという共同作業がその根幹になければならなかったことは確かであろう。

しかし、このような共同作業は多少なりとも価値観や世界観を共有していないと難しいはずである。デオグラシアス神父等の研究は、場所や時代や形式は異なるが、カトリック系の団体が関わる、主にカトリック信徒のためのプログラムを対象としているため、カトリックの精神性やその社会思想が実地の平和構築のプロセスでどのような役割を果たせるかを学ぶためのよい事例となっている。

筆者は2021年度も「社会のなかのカリタス」というタイトルで二回イベントを実施する予定である。「記憶・赦し・和解」をテーマに、ドイツ・旧ユーゴスラビア・ルワンダ／ブルンジの研究について、他の研究者にも話していただくか、と現在思案中である。例えば日本とアジア諸国との和解を考える上でも参考となるような、有意義な会となりえるのではないだろうか。

3. 「教会と社会」にかんする二つの考察

A. ともに生きるための知恵であるキリスト

冒頭で述べたように、「教会と社会」を企画した目的は主に学生をはじめ一般の人々に、教会と社会との関係という日本では馴染みの薄いテーマについて、少しでも知ってもらいたいということにあった。しかし、振り返ってみると、企画を担当した筆者自身、学んだことがたくさんあった。

具体的に言うと、ブックフェアでは「ともに生きるためのヒント」をたくさん見つけることができたし、講演では和解と共生について考えを深めることができた。そして、「世俗の時代」や「脱キリスト教の時代」などと欧米でも言われているが、多文化共生の時代でこそキリストの知恵とそれに由来する知識に学ぶことが多い、ということを書き通して再確認できた。

回勅や使徒的勧告などの教皇文書は当然のことながら教皇個人の思いつきではない。補完性原理の背後には「労働者の司教」とも呼ばれたケテラー司教がいるし、フランシスコ

教皇の「改革」を辿れば「カタコンベの誓い」があり、聖フランシスコがいる²。つまり、多彩な信仰者の多様な信仰の実践が教会の思想の源流である。もちろん、その根源にはイエスがいる。

それぞれの信仰者がそれぞれの時代に知恵そのものであるイエスの姿に倣い、かれらの学びが広い意味での「教え」として体系化されていく。集積された知識は、新時代の知恵を吸収し、発展していく。「キリストのからだ」である教会が「真の隣人」であるイエスに「ともに生きること」を学んでいく。そして、それはキリストとともに生きることでもある。カトリック社会思想の理論と実践のこのような姿を思い浮かべることが——いくぶん夢想、というか、一信仰者としての希望も含んでいるとは思いますが——同企画に携わっていただきたりあった。

フランシスコ教皇は上智大学を訪問された時に以下のような言葉をくださった。筆者もその場にいたが、いまになってようやくその意義がわかりかけてきたような気がする。

上智。人間は自らの資質を建設的かつ効果的に用いるために、真のソフィア、真の叡智なるものをつねに必要としてきました。あまりにも競争と技術革新に方向づけられた社会において、この大学は単に知的教育の場であるだけでなく、よりよい社会と希望にあふれた未来を形成していくための場となるべきです。³

B. 共生社会に生きるカトリック市民

来年、2022年は、信徒の積極的な社会活動「カトリック・アクション」を認め、その発展を促したピウス11世の回勅『ウビ・アルカノ・デイ』発布100年にあたる⁴。

日本では、自分の置かれた場所ががんばりなさい、というようなことがよく言われるが、我々の置かれた「場」で忘れられがちなのが、国家の主権者である国民、市民社会を担う市民としての立場である。しかし、中世欧州の王侯貴族によきキリスト者としての治世が求められたのと同様、現代の民主主義体制下のキリスト者には積極的な政治参加と社会活動が期待されて当然であろう。

² 「ケテラー司教」と「カタコンベの誓い」についてはそれぞれ桜井健吾氏と成井大介氏の推薦図書をブックリストのウェブサイトにて参照のこと。

³ カトリック中央協議会「教皇の日本司牧訪問 教皇の講話 上智大学訪問 東京・上智大学、11月26日」<https://www.sophia.ac.jp/jpn/news/PR/20191129all.html> (2021年4月7日閲覧)。

⁴ Pius XI, *UBI ARCANO DEI CONSILIO*, https://www.vatican.va/content/pius-xi/en/encyclicals/documents/hf_p-xi_enc_19221223_ubi-arcano-dei-consilio.html (Accessed on April 7, 2021).

カトリックの政治参加という点、カトリックの勢力の強い国では、道徳的な教義を国家の政策に反映させるためのロビー活動等がイメージされるかもしれない。しかし、日本ではカトリックはマイノリティであるし、そもそも多様性を尊重する共生社会では信仰に基づいた道徳観によって個人の自由を抑制する試みは受け入れられない。

歴史的にみると、教皇によるトップダウン型の統制が注目を集めがちなカトリック教会ではあるが、実際は自然発生的な信仰運動がボトムアップ型で教会の信仰の刷新に寄与してきているように、草の根レベルでの市民活動が教会の社会運動の大きな流れとなってきた。例えば、のちに世界に広がることとなったカトリックの慈善団体である「カリタス」も『ウビ・アルカノ・デイ』以前、1887年に、ドイツで活発であった様々なカトリックの市民団体の調整機関として創始されたのである⁵。

このように考えてみると、現代日本のカトリック信者には、上述したような、教会の培ってきた「ともに生きるための知恵」を学び、実践し、共有していくことが求められているのではないかとも思う。つまり、消極的でことなかれ主義的な「平信徒」ではなく、また、国家主義的で上から目線の「カトリック国民」でもなく、共生社会でよりよく共に生きることを目指す「カトリック市民」として、積極的に社会活動に参画していくことが、特に自由な立場にある非聖職者であるカトリック信者の召命といえるのではなかろうか。

国家をはじめどんな組織にも人を愛することはできない。なぜなら、人を愛することができるのは——「愛のまなざしを与える」ことができるのは——人だけだからである⁶。組織的な取り組みにおいても、大切なのは人と人との間の愛であり、かれらの属する団体やその上部団体、そして究極的には国家ができることはかれらにその機会を提供したり、その障壁を取り除いたりすることを通して、愛の実践を可能にすることなのである。

教皇ベネディクト16世は『回勅 神は愛』で次のように述べている⁷。

補完性の原理に従って、さまざまな社会組織が行う取り組みを寛大に認め、かつ支えながら、こうした自発的な努力を、困っている人と緊密に結ぶつけるような国家を、わたしたちは必要としています。(§28b)

よって、また振り出しに戻るようでもあるが、民主主義では国家の主権は国民である市民一人ひとりにあるため、隣人愛に中心的な価値を見出すカトリック市民には、政治共同体に隣人愛の主体としての市民のエンパワメントを求めるという重要な役割もあろう。つ

⁵ Caritas Deutschland. *Die Geschichte der Caritas*. <https://www.caritas.de/diecaritas/wir-ueberuns/verbandsgeschichte/uebersicht> (Accessed on April 7, 2021).

⁶ 『回勅 神は愛』 §18。

⁷ 教皇ベネディクト十六世『回勅 神は愛』カトリック中央協議会、2006年。

まり、カトリック市民には、政治活動によって隣人愛の実践の機会を確保したうえで、社会活動としての隣人愛の実践を行うことが求められているのだと言えるのではないか。

おわりに

コーディネーターとしての筆者にとって、「教会と社会」という企画を通して見えてきたものは、共生社会におけるカトリック市民の新たな可能性であった。多文化共生の時代には「差異を横断する統一性」(チャールズ・テイラー)であるカトリシズムの意義が輝いてくる⁸。そして、この時代は、社会のなかで具現化していく神の愛が教会の姿となる「隣人愛の秘跡」の時代であるとも言えるのではなかろうか⁹。

筆者は2021年度も「社会のなかのカリタス」というタイトルでイベントを計画している。また、ブックリストについても、内容を拡大・充実させて、四旬節にブックフェアを実施する予定である。

上智大学というキリストを根源とした「ともに生きるための知識」を培う場で、共生社会の発展のためにささやかながらも貢献できることは、一人のカトリック市民としての筆者の幸いである。

菊地 了 (きくち りょう)

(グローバル・コンサーン研究所／上智大学文学研究科哲学専攻)

⁸ Taylor, Charles, *The Secular Age*, The Belknap Press of Harvard UP, 2007, p. 8.

菊地了 (2020) 「隣人愛と人類愛——チャリティーとフィランソロピーについての哲学的考察——」 『グローバル・コンサーン』第3号 65-85頁、71頁-76頁 (上智大学)。

⁹ Gutiérrez, Gustavo (2009). *Nachfolge Jesu und Option für die Armen: Beiträge zur Theologie der Befreiung im Zeitalter der Globalisierung*, Herausgegeben von Mariano Delgado. Kohlhammer: 44-46.




教会と社会

**ドイツで活動するブルンジ人平和活動家
デオグラシアス師を招いて**



マルフキロ・デオグラシアス師（カトリック司祭、神学博士）は
平和と和解を専門とする神学者として、
そして、Ubuntu（=寛大さ、人間らしさ）を培う平和団体の代表として、
母国ブルンジやドイツ・フライブルク大学を拠点に国際的に活躍されています。
デオグラシアス師の研究と活動についてお話を聞いてみませんか？
お話のあとはみなさまと懇談する機会を設けます。
また、ドイツから研究者・学生・市民のみならずも参加する予定です。



**Afrikanisches Netzwerk für Frieden,
Versöhnung und nachhaltige Entwicklung**
平和・和解・持続可能な開発のためのアフリカのネットワーク



文化と教養



平和構築



ドイツ・ガワク大統領
(当時)と



アフリカにおけるプロジェクト



教育振興



とき：2021年2月11日（木）17:30-19:00
ところ：IGC Online (Zoom使用予定)
進行：菊地了 (グローバル・コンサーン研究所)
参加：どなたでもご参加できます。当研究所HPにてお申し込みください。(※切：2/9 (火))。参加費無料。
お問い合わせ：i-glocon@sophia.ac.jp
言語：ドイツ語 (日本語逐次通訳付き)
主催：上智大学研究機構グローバル・コンサーン研究所
共催：RAPRED-Girubuntu e.V., Universität Freiburg (AB Caritaswissenschaft und Christliche Sozialarbeit)

P. Dr. Déogratias Maruhukiro, ISch, PhD

資料1 広報資料（日本語版）




Sophia IGC Webinar Kirche und Gesellschaft

P. Dr. Déogratias Maruhukiro, ISch, PhD



Abstrakt
Die Förderung von Frieden und Versöhnung erfordert sorgfältige, multidimensionale und multidisziplinäre Arbeit. Die Zusammenarbeit zwischen akademischen Institutionen und Nichtregierungsorganisationen in der Forschung und Friedensförderung scheint ein ungenutztes Feld zu sein, das, wenn sein Potenzial genutzt wird, zu guten Ergebnissen führen kann. Die Universität Freiburg (AB Caritaswissenschaft und Christliche Sozialarbeit) arbeitet seit einigen Jahren mit RAPRED-Girubuntu e.V. zusammen, und im Rahmen dieser Zusammenarbeit wurden bereits viele Projekte ins Leben gerufen. Nach einer kurzen Vorstellung von RAPRED-Girubuntu e.V. und des Instituts für Caritaswissenschaft werde ich versuchen, die Ziele der Caritaswissenschaft zu erläutern. Anschließend wird die verschiedenen Projekte von RAPRED-Girubuntu e.V. dargestellt. In dieser Darstellung wird deutlich gemacht, dass alle Projekte die durchgeführt werden, die gleiche Strategie, das gleiche Leitmotiv verfolgen nämlich: die Förderung von Frieden und Versöhnung aus der Perspektive der Caritaswissenschaft.



**Afrikanisches Netzwerk für Frieden,
Versöhnung und nachhaltige Entwicklung**



11. Feb. 2021 (Do.) 9:30-11:00 (MEZ)
IGC Online (per Zoom)
Moderator: Ryo Kikuchi (IGC, Sophia Uni, Tokyo)
Kontakt: i-glocon@sophia.ac.jp
Anmeldung auf IGC HP <dept.sophia.ac.jp/is/igc/>, Anmeldeschluss 9. 2.
Sprache: Deutsch/Japanisch
Veranstalter: Institute of Global Concern, Sophia University, Tokyo
In Zusammenarbeit mit RAPRED-Girubuntu e.V., Universität Freiburg (AB Caritaswissenschaft und Christliche Sozialarbeit)

P. Dr. Déogratias Maruhukiro, ISch, PhD

資料2 広報資料（ドイツ語版）